てっぺんの葉っぱ

自分で考え自分でなやむ

5年　T・Mさん

高学年になってから、友達との関係が広がると同時に難しくなったと感じることが増えた。自分の気持ちを言い過ぎて失敗してしまったり、逆にマチのように友達に逆らえず流されてしまったりすることがあるからだ。そんなときこの『てっぺんの葉っぱ』を読んだ。主人公のマチが「なんでも願いが叶う」というま法の葉っぱで、失敗した過去を消そうと願おうとする姿を見て、まるで自分を見てるようだと思った。僕にも「あの失敗をやり直したい」と思うことが何度もあるからだ。

僕がこの本を読んで一番心に残ったのは、マチが過去をま法で消そうとするのをやめ、自分の心と向き合っていくすがただ。最初はユリアに流されてばかりだったマチは、窓から花びんの水を捨てて怒られた事件をきっかけに、自分で考えて決めることの大切さに気づいていく。自分たちで実際に水をかぶって「なぜダメなのか」を体感し、しっかり悩んで答えを出すマチの姿はとても立派だと思った。

また作中に出てくる草木染めの話もとても印象に残った。草木染めは、最初から思った通りの色にならず、失敗を重ねて試行錯誤しながら染めていくのだという。人間も同じで最初から完ぺきな人なんていない。失敗を恐れるのではなく、自分で考えてやり直すことで自分の「色」が作られていくのだと気づいた。

自分も失敗したとき、過去を変えたいと思ったり人のせいにしたりすることがある。しかし大切なのは「絶対に失敗しないこと」ではなく、「なにが悪かったのかを自分で考え、次に活かすために行動すること」だ。流されるだけでは本当の友達ではなくただの話し相手になってしまう。マチが最後に自分の意見を言えたように、自分をしっかり持つことが大切なのだと分かった。

もしこの本でなければ、僕は「自分で考える大切さ」がわからないままこの作文もお母さんに手伝ってもらっていただろう。これからは失敗から逃げずに自分の頭で考え、自分の意見を大切にしながら友達と向き合っていきたい。